

学級通信は子ども・保護者との信頼関係構築の ツールとなっているか

—学級経営における学級通信の役割を考察する—

益 田 亮 英

Is the classroom newsletter functioning as a practical tool to build trust between
teachers, pupils, and parents?:
to examine the role of the classroom newsletter in classroom management

Ryoei Masuda

1 はじめに

教職の特徴は、大学卒業して社会人として歩み始めたときから、一人前として表舞台に立たなければならないことである。保護者からは、授業の進め方や学級経営などについてベテラン教員と同様の成果が求められる。新任教員の悩みは、保護者対応、学級経営、授業展開、職場の人間関係などと数えればきりがない。

文部科学省の調査によると、新任教員の離職者数は毎年300人を超えている¹。そのうち100名近くが精神疾患を含む病気を理由とした退職になっている。本学の卒業生でも競争率10倍の難関を突破して、新卒で採用されたにもかかわらず、1年以内に退職せざるを得なかった者もいる。また退職にはいたらなかったものの、1年目を苦しみながら乗り越えた者もいる。そのような若手教師に、保護者や子どもとの信頼関係の構築にどのように努め、コミュニケーション取っているかを尋ねると、学級通信や連絡帳による情報の共有を大切にしていると答える。

そこで、実際に、学級通信をどのようにとらえ発行しているか、その労力と効果をどう感じているかなど、本学卒業生の職経験4年目以内の現役教師にアンケート調査を実施した。学級経営を充実させるために、学級通信にどんな期待を持って発行しているか、学級通信が対保護者、対児童・生徒のコミュニケーションツールとなっているか考察することとした。

2 調査結果と考察

調査は本学を卒業して、正規教員（以下教諭）、臨時採用講師（以下講師）として小学校に勤務している経験4年以内の者を対象とした。4年以内としたのは、本学で小学校教諭の免許が取得できるようになった初年度の卒業生が本年度4年目を迎えたからである。

32名から回答があった。内訳は教諭22名、講師10名、そのうち30名が担任をしており、2名が担任になっていなかった。ここでは担任として回答のあった30名のアンケートについてその結果を集計し分析することとした。

なお、アンケートの項目については、鈴木健二「学級経営における学級通信の役割」²（2012）を一部参考にして作成した。ここでは本調査の結果を考察するにとどめ、鈴木の研究と比較することはしていない。

（1）基本質問

1－1 性別

（表 1－1）

男	5
女	25
計	30

1－2 教職経験年数と身分

（表 1－2）

	3年以上	2年	1年	計
教諭	12	4	6	22
講師	3	2	3	8
計	15	6	9	30

1－3 担任

（表 1－3）

	低学年	中学年	高学年	特別支援
教諭	11	5	4	2
講師	1	3	1	3
計	12	8	5	5

経験年数と同様に担任についても、教諭と講師に分けて集計した。低学年担任が多いが、経験年数の関係から見ると低学年12名の内、7名が1年担任で、いずれも経験2年以上の教諭で講師はいない。また高学年5名の内、2名が6年担任で経験2年以上の教諭である。新卒者は、1年生及び6年生の担任にはなっていない。

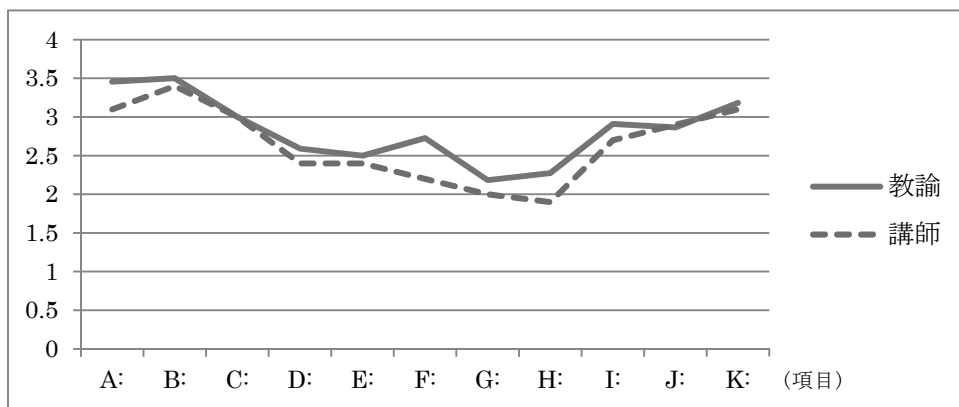
1－4 職務能力に関する認識

自らの教職に関する能力をどのように認識しているか尋ねたものである。4：とても充足している 3：やや充足している 2：やや不足している 1：とても不足しているの、4段階で評価したものを教諭と講師に分けて集計した。

(表 1-4)

項目	教諭 (平均値)	講師 (平均値)
A: 教師の仕事に対する使命感や誇り	3.5	3.1
B: 子どもに対する愛情や責任感	3.5	3.4
C: 子ども理解	3.0	3.0
D: 児童・生徒指導力	2.6	2.4
E: 集団指導の力	2.5	2.4
F: 学級づくり	2.7	2.2
G: 学習指導授業づくりの力	2.2	2.0
H: 教材解釈の力	2.3	1.9
I: 豊かな人間性や社会性	2.9	2.7
J: 常識と教養	2.9	2.9
K: 対人関係能力・コミュニケーション力	3.2	3.1

職務能力については、使命感や、子どもに対する愛情や責任感が高いが、教材の解釈力や授業づくりに関しては低く評価している。教諭と講師の認識に違いがあるか比較したのが表 1-4 で、それをグラフ化したものがグラフ 1-4 である。ほとんどの項目で講師の方が自己評価に関しては低い値を示している。これは、身分的に不安定な状況にあって、不安感が表れているものと思われる。しかし、子ども理解や、常識と教養については、教諭と同じ自己評価を示していることは高いプライドを持っていることがわかる。



(グラフ 1-4)

(2) 学級通信に関する質問

2-1 発行回数

(表 2-1)

	毎日	週 1 回	月 1 回	その他
教諭	0	18	1	3
講師	0	7	0	1
計	0	25	1	4

(その他は、隔週又は行事に合わせるなどの不定期発行)

学級通信を毎日発行している者はいなかった、30名中25名が週1回の発行となっている。月1回の1名については、月に1か2回の発行で不定期ということ、その他は、隔週発行が2、学年通信を発行しているので学級通信は不定期が1である。また、その他に昨年は発行したが今年は発行していないが1あったが、以下の質問については、昨年をもとに回答した。

2-2 発行の動機

(表2-2)

動 機	人数
他の先生も発行している	13
上司の勧め	5
自らの意志	16
その他	4

(複数回答有)

発行の動機については、複数回答を求めた。他の先生たちも発行している中で、自らの意志で発行している者が多くなっている。上司の勧めで発行した者もいた。またその他は、時間割や連絡事項を知らせるのは、教師の義務と答えた者もいた。大方の認識として、学級通信の発行は、担任として当然の職務ととらえていると思われる。

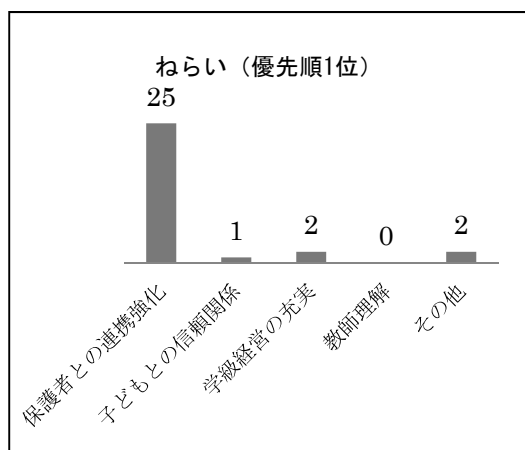
2-3 発行のねらいと優先順位

(表2-3)

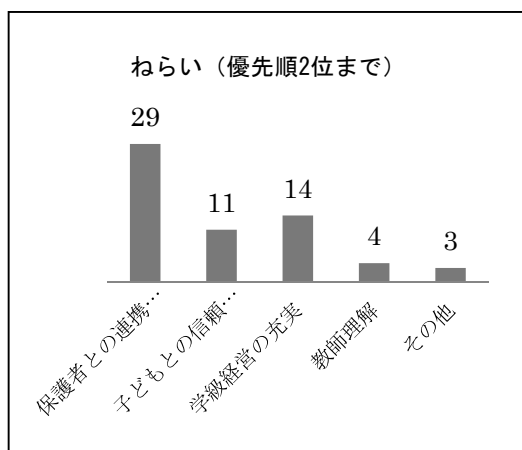
ねらい	人数	優先順位		
		1 位	2 位	3 位
A：保護者との連携強化	29	25	4	0
B：子どもとの信頼関係	22	1	10	11
C：学級経営の充実	21	2	12	7
D：教師理解	10	0	4	6
E：その他	5	2	1	2

(その他は、連絡や時間割の徹底のためなど)

この項目については、鈴木のアンケートを参考にしたものであるが、ここでは優先順位3位までを集計した(表2-3)。優先順1位に注目したい。グラフ2-3-1では、保護者との連携強化を30名中25名が1位に挙げており保護者との信頼づくりに大きな期待を持っていることがわかる。優先順位を2位まで拡大してみると、グラフ2-3-2のように、学級経営の充実や子どもとの信頼関係など様々な期待が増えてくる。



(グラフ 2-3-1)



(グラフ 2-3-2)

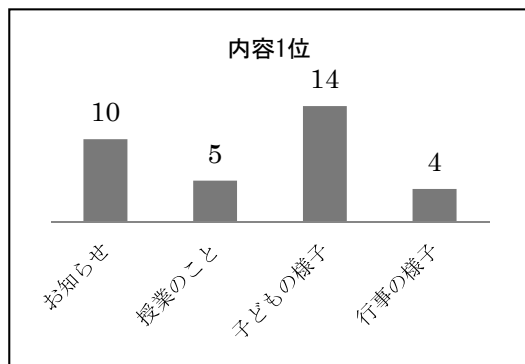
2-4 主な内容と優先順位

内容についても、鈴木を参考にしたものである。前項と同じように3位までを集計している（表2-4）が、内容の1位を挙げたものを見ると、トップは子どもの様子、次がお知らせとなっている（グラフ2-4-1）。子どもの様子や行事の様子については、学校での子どもの日常活動の様子であり、学級の雰囲気などである。これは保護者が直接目にしない内容であり、保護者にとっては貴重な情報である。お知らせとしての時間割や授業に必要な持参品の周知は、子どもの学習活動に必要な連絡であり、授業の円滑な展開の上では重要なことである。学級通信で、担任としての情報を提供して、保護者との情報を共有して信頼関係を作りたいという気持ちが感じられる。

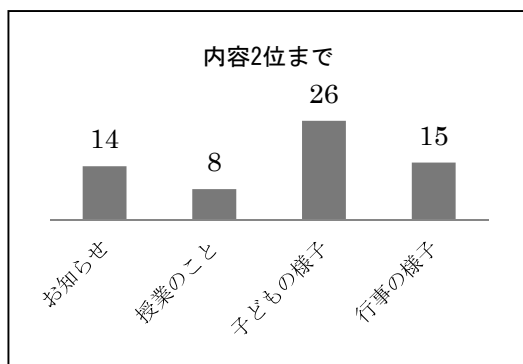
また、内容を2位まで広げると、授業のことや行事の様子などが増えて、学級通信の内容の豊富さを読み取ることができる。（グラフ2-4-2）

(表 2-4)

内容	人数	優先順位		
		1位	2位	3位
A：お知らせ	21	10	4	7
B：授業のこと	13	4	3	6
C：子どもの様子	28	14	10	4
D：行事の様子	26	4	13	9
E：担任の教育観	0	0	0	0
F：その他	0	0	0	0



(グラフ 2-4-1)

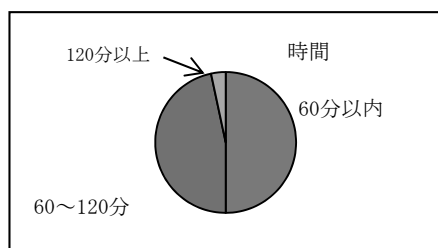


(グラフ 2-4-2)

2-5 学級通信づくりに要する時間

(表 2-5)

時間	人数
60分以内	15
60～120分	14
120分以上	1



(グラフ 2-5)

1回の学級通信づくりにどれだけの時間をかけているかでは、一人だけ120分以上であったが、他は1時間以内と2時間以内が半々である。1週間に1回発行している者がほとんどで、1週間に学級通信に要する時間は2時間以内ということになる。学級通信とは別に、学年だよりを学年担任が輪番制で発行しているところもあり、当番になった時は2部発行することになるので、大変であると回答した者もいた。

2-6 発行に際して上司の点検

(表 2-6)

項目	人数
事前に見せている	22
見せていない	4
事前点検はないが、発行後に提出している	4

表2-6は、学級通信の発行に際して、学年主任、教頭、校長などの上司にあらかじめ点検してもらっているかをたずねた結果である。30人中22人が事前に、上司に学級通信を見せている。子どもの個人情報保護の問題など、印刷物に関しては保護者からのクレームなどが多くなることが懸念されるので、上司にあらかじめ見せておくことが、経験の少ない教師にとっては安心感につながっていると思われる。後のアンケートにもあるが、今回の調査では学級通信がもとになったトラブルやクレームはなかったと回答している。ただ、上司の点検で訂正が多く、やり直しで

完成までに3日かかってしまうとの回答もあった。

2-7 保護者の反応（自由記述）

① 肯定的な反応

保護者からは、連絡帳や、学級懇談会など様々なチャンスで学級通信への反応があっている。最も多かったのが学校での子どもの活動の様子がわかるということ、さらに、お知らせによって、授業に必要な品物などの確認ができるなど肯定的な反応が多い。

保護者としては、自分の目から離れた学校でのわが子の生活の様子や、他の友達とどのような人間関係を築いているかなどが不安でもあるし、知りたいところである。保護者の反応についての回答から、その不安に答えていることが判断できる。以下具体的な記述の例である。

- ・子どもが、学校のことを話してくれないから、子どもの授業の様子が分かっていい。写真から楽しさが伝わる。（3年目）
- ・子どもの良い姿を伝えるコーナーで、丁寧なノートの見本を掲載したところ、他の家庭でもノートを見ていただけるようになった。（3年目）
- ・差し障りのない趣味の話など、担任の「つぶやきコーナー」を掲載したところ、好評で親近感を持ってもらえた。懇談会の話しのきっかけになった。（3年目）
- ・「先生は～ですね！」と話のネタになった。（3年目）
- ・子どもの学校での様子が知れてうれしい。家庭での会話のきっかけになっている。担任の考えがよくわかる。（3年目）
- ・1年生は、保護者の協力が必要なので、学級通信でお願いやお知らせが多くなるが、よく協力してもらっている。教材の準備や家庭での復習などとても助かっている。（2年目）
- ・学校での子どもたちの様子や、行事等の様子、学習の様子などが分かると言ってもらえた。また、学習面でのお願いやお知らせを伝えたので、家庭でも取り組んでもらい、苦手な子ども点数が伸びた。（2年目）
- ・毎週、予定や持ち物の確認ができてよい。（2年目）
- ・忘れ物が少なくなった。漢字テストの予定を連絡したところ、親子で対策をして学級全体で良い結果を出した。（2年目）
- ・子どもの写真を見て、学校でこんなに活発に活動していて安心した。（1年目）

② 否定的な反応（クレームなど）

なし

2-8 子どもの反応（自由記述）

① 肯定的な反応

子どもの反応は、率直で自分の写真や似顔絵が載った時、喜んでいるが最も多かった。また、題目を毎回子どもに書かせているが自分の順番になるのを楽しみにしている。誕生日コーナーも好評である。また、次週の予定欄を見て楽しんでいる子どももいるなど、子どもに直接関係したところでの反応が多く挙げられている。

② 否定的な反応

なし

2-9 学級通信のねらいと効果

(表 2-9)

項目 \ 評価・人	大いに効果があった	多少効果があった	あんまり効果がなかった	全く効果がなかった	平均
保護者との連携強化	8	17	4	1	3.1
子どもとの信頼関係	5	20	5	0	3.0
学級経営の充実	6	18	5	1	3.0
教師理解	2	21	6	1	2.8
その他	0	0	0	0	0

学級通信のねらいについての効果をどう感じているかでは、実数は表 2-9 のとおりであるが、大いに効果があったを 4、多少効果があったを 3、あんまり効果がなかったを 2、全く効果がなかったを 1 として平均値をとった。保護者との連携強化については 3.1 と高く、子どもとの信頼関係、学級経営の充実も 3.0 とそれぞれに高い効果を感じていることが分かる。全く効果がなかったと感じている項目が 0 ではなかった。また、教師理解については、ねらいの中で 1 位に挙げたものではなく 2 位 3 位に 10 人が挙げただけであるが、効果としては、大いにあったと多少あったと半数以上が評価している。

2-10 学級通信の効果を感じたエピソード（自由記述）

学級通信の効果は、保護者とのやり取りの中でさまざまな形で感じ取っていることが分かる。

- ・懇談会時の話題づくりになった。また、似顔入りの子どもの紹介を記事にするために子どもをよく観察するようになり、通知表の所見が書きやすくなった。（3 年目）
- ・日本語が良く理解できない外国人の母親のために、すべての漢字にルビを振ったところ、1 年生の児童も楽しそうに読んでいた。（3 年目）
- ・恥ずかしくて学校のことを親に言えない子どももいたが、保護者には学級通信で 1 週間の出来事が分かるからよかった。また、通信がきっかけで、家庭内の会話が増えたと喜んでくれた。（3 年目）
- ・持ち物が揃わないことが多かったのが、毎週持ち物を伝えることで忘れ物が少なくなった。（2 年目）
- ・クラス全体の様子を伝えることで「うちの子だけでなく、今はそんな時期だと分かって安心した。」と言ってもらえた。（2 年目）
- ・集金日を載せたところ、集まりが良くなった、忘れ物も少なくなった。また、テストの日を知らせたところ見通しを持って勉強ができるようになった。（2 年目）
- ・授業の様子、子どもの作品の写真、うれしかったり成長を感じたエピソードとともに、担任としての思いを書いていたらクラスの一体感が強まった。（2 年目）
- ・夏休みが近づいたので「早寝、早起き、朝ごはん」の徹底と、こまめな水分補給をお願いしたところ、週明けの保護者の連絡帳で「土日もしっかり早寝早起きしましたよ」とコメント

をもらい、家庭との連携ができていることを実感した。(1年目)

- ・保護者の方に直接「いつも子どもと一緒に読んでいます。毎週楽しみにしています。」と言われたときに、学校での子どもの様子などが伝わっていたと学級通信の効果を感じた。(1年目)

2-11 学級通信の負担感

この質問は、学級通信の効果や満足感と、それを発行するための時間や精神的な負担感などの労力との関係をたずねたものである。表2-11からは、学級通信づくりに要する労力に対する負担感は感じられない、いわゆる労力対効果については満足度が高い。顕著な効果がなく無駄と思うとの答えが2名あるが、その理由についてはアンケートからは読み取れない。また、通信づくりに120分以上かけていている1名は、効果を考えるときつくないと答えた。

その他は1年目で経験が浅いのでわからないという回答が多かったが、水曜日ぐらいから、次号が気になっていると答えた者もあった。

(表2-11)

項目	人数	(%)
効果を考えると、時間かけてもきつくない	22	73.3
顕著な効果がないので無駄だと思う	2	6.7
その他	6	20.0

2-12 学級通信の工夫（自由記述）

保護者に興味を持って読んでもらうために学級通信にどのような工夫をしているかの問いには様々な回答が寄せられた。

- ・タイトルを子どもの手書きにするなど、子どもも参加できる通信づくり。あまり言葉を発することのない子を中心に感じていること、頑張っていることを紹介する。(3年目)
- ・毎回写真を1枚は載せる。(3年目)
- ・保護者が見ることのできない子どもの様子を伝えることを一番にして、家庭での会話のネタを提供している。(3年目)
- ・学校行事などの場合に、号外を出して写真に吹き出しをつけて子どもの声を、イメージしやすいように伝えている。(3年目)
- ・子どもの似顔絵や、軽い担任のつぶやきなどを載せて、興味を持ってもらう。(3年目)
- ・記録として残るから、良い面を伝えるよう心掛けている。課題については、電話等で伝えている。(3年目)
- ・低学年(1年)の場合、家庭で見てもらえることが多いので、このような学習を、このように指導していますなどの学習の内容について伝えている。併せて学習に必要な準備物等のお知らせなど載せている。(2年目)
- ・次週の予定や持ち物等を伝えることを第一目的とし、文字の大きさも12Pと大きく見やすくしている。(2年目)
- ・写真を載せる、誕生日の児童の紹介欄を写真とともに載せている。(1年目)

学級通信の発行の工夫として、多かったのが写真で子どもの様子を知らせたり、タイトルを、

子どもの手書きにしたり、誕生日を紹介するなど、親子が一緒になって学級通信を囲むように工夫されていることである。連絡事項として、準備物などを周知していることも窺える。なお、学級通信のレイアウトについては、マンネリ化しないように毎回変化を加えるものと、見やすくするためにレイアウトは変えないといった回答があった。

2-13 学校通信への配慮

学級通信の発行に関しては、様々な点に配慮している。写真には多くの子どもに焦点を当て、一部の子どものみが頻繁に写ることのないようにしたり、事前に写真の掲載可否の確認をするなどしている。また、顔をぼかしたり、公平・公正にプライバシーの保護にも努めている。レイアウト、言葉遣い、文章にも心掛けて読んでもらえるような気配りがなされている。

- ・クラスの中に一人でも嫌な気持ちにならないような通信
- ・同じ子どもばかり載せない。
- ・言葉の使い方が硬くなり過ぎず、親しみやすい文章
- ・通信に載せてはいけない子どもへの配慮
- ・写真には児童がまんべんなく写るように
- ・結果のみでなく、そこまでの過程や試行などを書く
- ・写真の顔をぼかす。体育服の名前をぼかす。
- ・文章が多くなり過ぎないように写真や絵で見やすさを重視している。保護者に対して「子どもたちに～してほしい」という一方的なお願いではなく、「一緒に～しているところです」等、担任側の思いと一緒に、「学校でもがんばっているのだから家庭でもご協力を！」という伝わり方になるように気をつけている。
- ・少ない人数なので、個人が特定されてしまうので、あんまり個人的なことは書かないようにしている。

2-14 児童・生徒、保護者、同僚の教師とのコミュニケーションは取れているか

4：とても取れている 3：やや取れている 2：やや取れていない 1：まったく取れていない

(表 2-14)

項目	評価 (平均)
児童・生徒とのコミュニケーション	3.7
保護者とのコミュニケーション	3.2
同僚教師とのコミュニケーション	3.5

この質問に関しては、大変評価が高い。保護者とのコミュニケーションに関して二人が2と答えただけで、残りは4又は3の評価をしている。

「やや取れていない」の評価をした二人については、二人とも教職の経験は3年目であるが正式採用になって1年目であり、前の2年間は、特別支援学級の副担任、あるいは少人数学級の教科担当の経験しかなく、学級担任としては日が浅く学級通信の効果についてもまだわからないとしている。

3 学級通信の効果

今回のアンケート調査の結果から、若い教師が子どもや保護者との信頼関係を築くために、学級通信に大きな効果を実感していることが分かった。学級通信発行のプロセスは以下のようになる。

- ① 保護者や子どもとの信頼関係を築くことを目標に、
- ② 学級通信の発行は担任業務の一つととらえ、
- ③ 自らの意志で、あるいは、同僚が発行しているから、
- ④ 週に1回の発行に、1～2時間の時間をかけて、
- ⑤ 子どもの学級での様子や連絡事項（時間割や持参品など）、あるいは、担任の自己開示を含めて、
- ⑥ 写真や話題が一部の子どもに偏らないように、“公平・公正、正確に”をモットーに、シンプルに読みやすい文章で、
- ⑦ 子どもに題字を書かせたり、誕生日の子どもを紹介したりなど、興味・関心を引くように工夫を凝らしながら、
- ⑧ 上司に点検指導を仰ぎ発行している。

この結果、学級通信には肯定的な反応が多く、クラスがスムーズに運営されている要因の一つになっている。

『子どもの良い姿を紹介する「今週のきらりさん」で、“丁寧なノートのまとめ方”を紹介したところ、他の家庭でもノートを見てもらえるようになった。また、同じコーナーで“廊下でゴミを拾っている姿”を紹介したら、他の子どもの行動にも変化が見られ、道德等の教科とも連動させた。』のエピソードにもあるように学級通信への敏感な反応が、発行を続ける原動力にもなっているようである。

学級通信は、担任のつぶやきが学級懇談のきっかけとなったり、担任の人間性理解につながるなど担任と保護者の信頼関係を強めている。子どもの様子や、行事の様子など子どもの学校生活を通信で伝えることによって、見えない部分が理解でき保護者に安心感を与えている。

保護者、同僚、子どもたちとのコミュニケーションが取れていると評価した者が大変多かったことも、学級通信の効果として受け止めることができる。

また、ほとんどの者が、事前あるいは事後に上司の指導を受けている、このことが、経験の浅い教師にとっては安心感と自信につながっていると思われる。

新採1年目に、毎週、学年主任から学級通信の型を提供してもらい、それに書き込んでいたので、比較的気楽に発行できたという回答もあった。初任者の負担を軽減する意味では学年主任のこのような配慮もありがたい。

4 おわりに

学級経営は、授業展開、生活指導とともに学級担任にとって、最も重要な活動の一つである。その学級経営をうまく展開するためには、保護者の理解や協力は欠かすことができない。保護者の理解や協力を得るためには保護者との信頼関係の構築が必要である。学級通信という手段を活

用して、適切な情報を提供し、その情報を共有することによって担任と保護者の絆が強まる。このことがよりよい教育効果を生むことは間違いない。

学級通信を発行していないと答えた中に、「昨年は、発行したが、今年は発行していない。理由は学年主任が変わって方針が変わった。」というものもあった。また、不定期発行は、「学年通信を毎週発行するので、学級通信は2～3週間に1回発行している。」という回答もあった。

学級担任にとって、学級通信は欠くことのできない存在であるということが今回の調査で確認できた。しかしながら、週1回の発行で120分近い時間が必要である。このことは「担任業務の一つであり、苦ではない。」と答えているものの、「効果は感じているが、きついものはきつい」という声も無視できない。学級通信は保護者や子どもとの信頼関係を築き、的確な学級活動を進める上で有効な手段であるが、日々の多忙な担任業務の中で、どのように位置づけるか今後の課題である。

注

- 1 平成27年度公立学校教職員の人事行政状況調査について
http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/_icsFiles/afieldfile/2016/12/21/1380740_06.pdf
- 2 鈴木健二「学級経営における学級通信の役割」
『愛知教育大学教育創造開発機構紀要』vol.2 pp103～111, March, 2012